

【巻頭詩】

グラン' マーマレード、マジカル・ビレッジへの道



作者：鈴木純子（本名：金内純子）

神戸市生まれ。京都市立芸術大学西洋画科を卒業後、絵本に興味を持ち、講談社絵本新人賞、小学館童画新人大賞などに応募し、入選を重ねる。1985年第1回大阪国際児童文学館ニッサン童話と絵本のグランプリで絵本優秀賞を受賞、1989年「サンタクロースのさいごのプレゼント」が第5回の同グランプリで絵本大賞を獲得した。

現在は絵本及び雑誌のイラスト、キャラクター制作などの仕事をしている。

グラン' マーマレード、マジカル・ビレッジって知ってる？

そこはだれでもいける不思議村だよ。どこにあるかって？

どこにもあつて、どこにもない、だれでもいけて、だれでもいけない、それがマジカル・ビレッジさ。

それは、時の過ぎ行く狭間にあつて、一瞬が永遠に変わったところ。

心やさしい村人がたくさん住んでいて、心なごむところがたくさんあつて、それはそれは、素敵なところ。

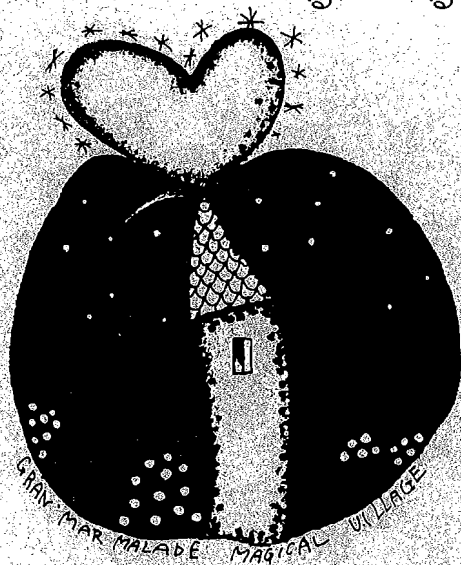
マジカル・オレンジの実がたわわにみえる「マジカル・オレンジの森」があり、森の奥には村人たちの好物のマジカル・マーマレードをつくってくれるグラン' マーマレードのお店があるよ。

ねえ、ねえ君も来てみない？

そしてマジカル・マーマレードを食べてみない？

心の中に小さな明かりが灯るよつだよ。心に明かりが灯ったら、

いやなことなんか隅っこにいっちゃようよ。



そうしたら村人たちと遊ばない？

みんな君たちと同じさ。

同じことで悩んでいたたり、悲しんでいたたり、それを知ったら、君も なあんだって思うはず、独りぼっちじゃなかったんだってね。

やさしい気持ちで、君の住む街へ戻るよ。

マジカルイエローに輝く、素敵なたまごにであつたら、また思い出してね。

そこにきつとあるグラン' マーマレード、マジカル・ビレッジへの道のことを・・・

93年秋・CD-ROM絵本「グラン' マーマレード・マジカル・ビレッジ」発売



グラン' マーマレード、	
マジカル・ビレッジへの道	2
目次	3

《 特集 》

トーク	
コンピュータがひらく自立支援	4
PROP PRESS	20
観て食べ歩記	
神戸ハーバーランド	22
「感搜文」遠くで近くで見つけたモノ	
スラッシュのアメリカ体験	25
VANGUARD!活動報告	
素敵にたくさん出逢えたから	28
プロップ・ネットの話題から	
'94/5 Version	32

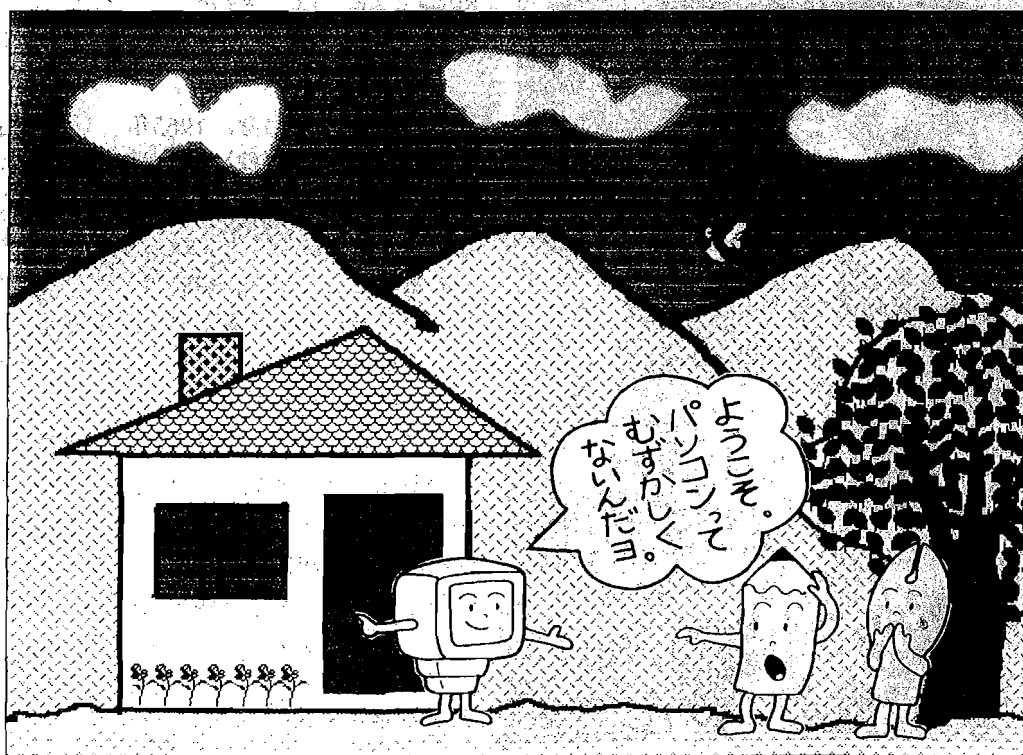
プロップ・ネット・	
ユーザー通信環境調査	34
風流 京愛の俳句コーナー	37
コンピュータ作曲入門	
自分の音楽を作ってみようVOL.2	38
私も講演が聞きたい!	
堺市第13回市民講座での	
OHP導入実験	44
なでちゃんのこの本は絶対読んで!!	
「新装版 新ニッポン見聞録」	46

《 新連載 》

み〜んなおともだち	48
プロップ・セミナー日程表	49
お知らせ	50

。。。文中の名前について。。。

誌面で執筆者名や編集者名に、プロップ・ステーションの運営するパソコン・ワープロ通信ホスト局「プロップ・ネット」でのハンドルネーム（ニックネーム）を使用している場合があります。そのため、耳慣れない妙な名前が出てきますが、決して怪しい者ではありませんので、ご安心を。なお、巻末に「名前対応表」を載せてありますので、興味のある方は、正体を暴いてみて下さい。



A. KATSUBE

トーク <<コンピュータがひらく自立支援>>

元気が出るコンピュータの話

日時 1994年4月3日(日) PM1:30~4:00

場所 朝日カルチャーセンター

(大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞社ビル13F)

内容 1:30~2:40 1部 太田氏とプロップ・ステーション代表竹中ナミのトーク
3:00~4:00 2部 障害を持つ人を交えての公開質問会

主催 プロップ・ステーション

後援 朝日新聞大阪厚生文化事業団

1994年4月3日(日)、朝日新聞社ビル13F「朝日カルチャーセンター」において、川崎医療福祉大学教授「太田茂先生」をお迎えして、今回のイベントを開催いたしました。当日は、スタッフを入れて約100名の参加者があり、立ち見も出るほどの盛況ぶりでした。コンピュータが障害を持つ人達の自立にどのように活用できるか、また、これからのコンピュータが真の自立支援機器としてどのように発達していくことが望ましいのか、それを推進するために、障害を持つ人自身と社会が、どのように意識変革を遂げていくことが必要なのか……。ハイテク機器による福祉支援活動のオーソリティである太田先生を交えて、参加者の皆さんと共に、これらの問題を考えました。



太田 茂 氏 略歴

川崎医療福祉大学教授・福祉システム研究会代表

1942年、岡山市出身。1965年、京都大学工学部卒業後、富士通(株)に入社。主としてソフトウェア開発に従事する。自らがポリオ後遺症から右足に障害を持つこと、長男が重度の聴覚障害児であることなどから、1985年「エレクトロニクスを障害者の福音とするために」を信条とする市民団体「福祉システム研究会」を設立。福祉機器の開発や教育活動を進めるかたわら、行政機関に働きかけ、1990年には、通産省の「情報処理機器アクセシビリティ指針」を実現させた。1991年4月からは、ハイテク福祉分野の知識をかわれ、川崎医療福祉大学教授に転身。「障害者の可能性を広げるコンピュータ」「困った時のエレクトロニクス」「暮らしが変わるハイテク機器」(以上、中央法規出版)、「ADAの衝撃」(学苑社)などの著書がある。

第一部：トーク

太田 茂 先生（川崎医療福祉大学教授）

竹中 ナミ（プロップ・ステーション代表）

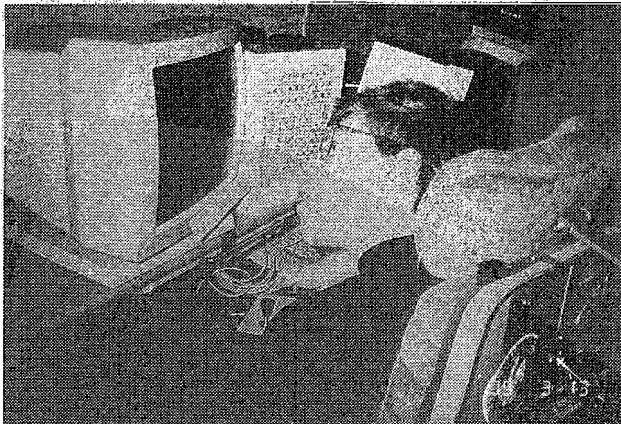
竹中（以下竹） 本日は皆様お忙しいところ、多くの方々にお集まり頂きありがとうございます。本日の講師、太田先生と私たちプロップの出会い、2月。四国で開催された「全国ボランティア研究集会」でした。その時、これからのプロップの活動に知恵を貸して頂きたい、アドバイスを頂きたい方だと思い、さっそく今回のイベントへのご協力を先生にお願いしたところ、ご講演を快諾して頂き、今日の会が実現の運びとなりました。太田先生は、川崎医療福祉大学医療技術学部の教授として大活躍されていますが、富士通で長い間開発をされていたという経緯もあり、コンピュータに関しては深い造詣がおりになります。また、市民団体福祉システム研究会の代表として、ハイテクの福祉的活用の研究・実践分野に

おいては日本のオーソリティでいらっしゃいます。対談に先立ち、まず太田先生からスライドで“様々なコミュニケーション支援機器”の紹介及びそれをどう活用していけばよいかというお話をして頂きましょう。

尚、本日この会のために手話グループ“つくし”のみなさんと、大阪府難聴者協会の要約筆記の方々にお手伝い頂いております。また、記録ビデオなどもボランティアの方に撮って頂いておりますので、ご紹介しておきます。では、太田先生お願いいたします。

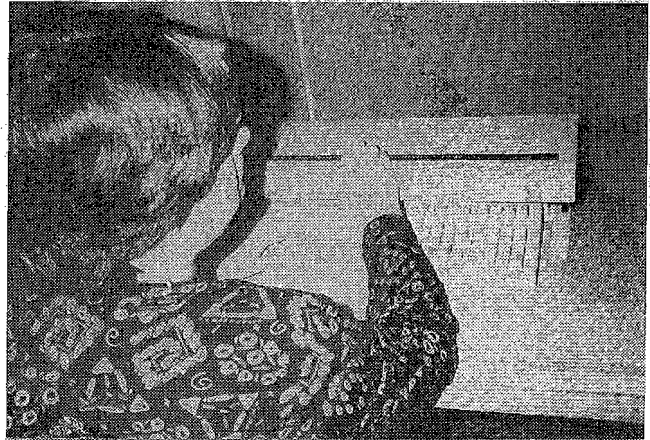
太田先生（以下太） 「コミュニケーション支援機器」と言うと難しく聞こえますが、簡単に言いますと、いろんなコンピュータをコミュニケーションの道具に使うということなのです。

○走査型入力装置 （スキャンニング・インプット方式）



脳性麻痺等、障害の重い人がパソコンに入力するための装置。画面の右側にキーボードに対応した表示板のようなものがあり、入力したい文字が光ったらボタンを押して文章を書く。1つのボタンで全ての文字を入力できるが、1文字のために全てをスキャンするので、入力には大変時間がかかる。入力時間を短縮するため、多少の工夫がされている。

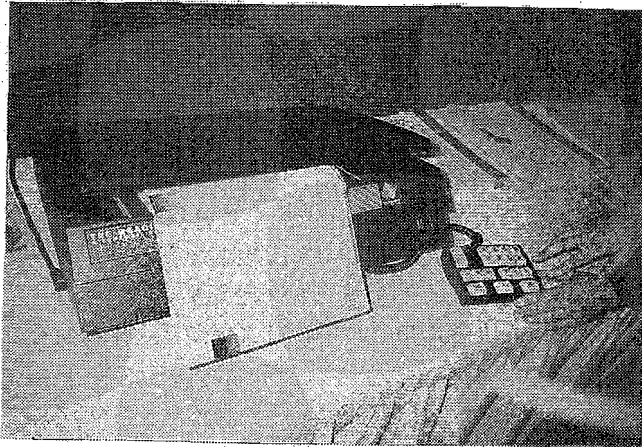
○ピンディスプレイ



全盲の人用ピンディスプレイの一種。通常、ピンディスプレイは20～40万円だが、写真のものは120万円ぐらい。キーボードよりもはるかに大きいサイズ（日本にもピンディスプレイ対応のATM（現金自動支払機）が10台くらいあるらしい）。

画面表示に合わせてピンが点字として現れ、視覚障害者が指先で読み取る。

○読書器 (KURZWEIL社製)



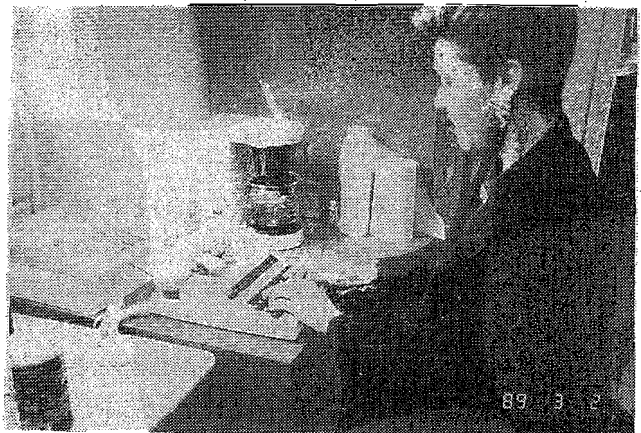
写真に示したものは新型の読書器。スキャナの下に本体が入っており、非常にコンパクトになっている。写真のように本を挟むと、きれいに読んでくれるという装置。英語だと99%以上の確率で読み間違いがなく、実用上、全く問題はない。価格も\$5,000くらい(約50万円)まで下がってきている。日本では国産のものはなく、また漢字が混じると精度も95%くらい。

○視覚・聴覚複合障害者用コミュニケーションツール



手前は普通のキーボードとディスプレイ。相手側はピンディスプレイと点字対応の6点キーボードになっており、複合障害の人達とのコミュニケーション用。

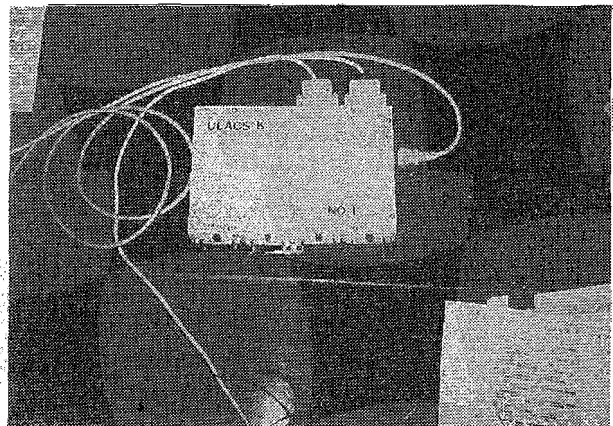
○TDD



電動タイプライターに音響カプラ(モデム)がついた、聴覚障害者のためのシステム。アメリカでは、ADA法により電話局はTDDの中継を義務づけられたので、現在はより使いやすいものとなっている。(ADA法:障害を持つアメリカ人法)

○ULACS

(Ultra Local Area Convassation System: 超近距離用会話装置)



キーボードを使って文字による会話(パソコン通信というチャット)の練習を行うためのパソコン接続器。この機械に8台までパソコンをつなぐことができる。コードの長さ(25m)に制限があるため、これ以上離れての会話はできない。

(太田先生自身が製作された支援機器)

中途失聴者の会合で使用しているところ(写真左手前が太田先生)

○速記用タイプライター



アメリカの裁判所、議会等で使用されている特殊なタイプライター。入力、話ことばに1ワード（語）ぐらいしか遅れないで、ついていくことが可能（ほとんどリアルタイム）で、プロジェクターに投影される。言葉抜けもない。記録者は2時間毎の交代で済み、長時間の会議も少人数で対応できる。要約筆記だと約10分毎に交代しなければならず、疲労度にもかなりの差がある。ただし日本語の場合、漢字かな変換の問題等があり、入力スピードは英語等に比べてはるかに遅いと思われるが、筆記者の労力という点において、将来は要約筆記に変わって普及する可能性が大きい。

太 コンピュータを使えば、いろんなコミュニケーションができる。コンピュータはそのための道具となっており、既に多くのものがある、ということをご紹介しました。（編集部注：会場では約30種類の機器が紹介されましたが、紙面の都合で抜粋してご紹介しました）

竹 支援機器についての大変貴重なお話でした。さて、スライドを拝見して感じたことは、ほとんどが外国製ということなんですが。

太 そうですね。日本でも様々なサポート機器がありますが、研究は欧米に比べ遅れています。しかしアメリカでも、サポート装置が付いた時には、そのマシンはすでに過去のもの・・・といったような悩みが実はあります。最先端の機器を障害者が使いこなせる状況は先進国でも、なかなかありません。

竹 今後、日本で支援機器を広めていくにあたってアメリカとの違い、日本がどういうところ

をクリアしていかなければいけないか、というお話をまず伺ってみたいと思います。スライドの中でADA法について少し触れましたが、日本におけるハイテク機器の福祉的基準として通産省のアクセシビリティ指針がありますが、この指針は先生の案を基に制定されたと伺っています。アメリカの法律と日本の指針との一番大きな違いは何なのでしょう？

太 日本のはあくまで指針。企業に対する努力目標でしかなく、強制力がほとんどないものとなっています。

竹 逆に言うとアメリカの法律は強制力があるということですね。

太 連邦法といいます。アメリカは合衆国ということで、53州が集まって国を形成しています。個々の州というのは独立した国みたいなもので、ほとんどの国民に関係する法律は、大半は州が持っており、連邦政府は防衛、外交等対外的な責任を担当しています。しかもstate（州）の力が強いので、連邦政府がいちいち全部の州に命令することはできません。アメリカにおいて、障害者の人権保障についてのエポックと呼べるのはリハビリテーション法だと思いますが、このリハビリテーション法という法律は連邦法ですので、連邦政府の種々の機関（連邦政府の役所あるいは連邦政府から補助金をもらっている所など）は連邦法を守らないといけないのですが、州政府とか民間企業は法律の拘束を受けないのです。リハビリテーション法は法律ですが、そういう意味では、対象となる人数はわずかなものでした。しかし、この法律が全米に与えた影響は非常に大きなものです。

竹 日本のアクセシビリティ指針について、こういうものをつくらなければいけないと思われたきっかけは何だったのですか？

太 それはやはりリハビリテーション法508条とその指針です。こういうのをぜひ日本に持ち込みたいと思いました。そうしたら、わりに通産省が協力的で、比較的短期間に成立してしまったんです。

竹 ということは日本の場合、コンピュータなどハイテク機器が障害を持つ人に使いやすいよう改造されていくには通産省が動かないといけないのですか。

太 ほんとに厚生省、労働省も関係すると思いますが、たまたま私が富士通というコンピュータ

会社に勤めており、通産省と関係が深かったことからお呼びがかかったのです。物を作るという部分では、やはり企業の所轄官庁は通産省ですから・・・でも本当は全ての関係省庁が連携して動いて初めて、指針の効力が発揮されると思います。

竹 企業がこういったサポート機器を作っていくためには、やはり通産省から（強制力はまだないけれども）指針が出るということは非常に大事であろうと？

太 まあ、法律になればもっと良いのでしょうが、日本で法律を作るということは大変難しいのです。アメリカはある意味で日本より法律を作るのが簡単、というと怒られますけど、一般人から盛り上がって作るという感じです。日本ではたいの法律は、官僚が細部まで予算から人員配置からみんな検討して作るんで、1つの法律を作るのに最低10年ぐらいかかります。まあそうでない法律もありますが、時間がかかるから早めにやる方がいいんじゃないかという気持ちがあり、またある意味では妥協した訳です。

竹 まず第1歩として指針を作る、ということだったんですね。で、アクセシビリティ指針が通産省から出されて、企業の反応みたいなものはいかがでしたか？

太 そうですね。通産省の指針作りの実作業は（社）日本電子工業振興協会（略称：電子協）という団体が行っていて、私もメンバーの一人なんです。電子協はデーターショウというコンピュータの展示会を毎年開催しており、4年前からはアクセシビリティコーナーというのを設けています。その後、アクセシビリティ推進室という専門セクションを作って取り組んでいる企業（日立）もありますし、IBMはSNS推進室というセクションを作って、この分野に取り組んでいます。日本電気や富士通もいろいろアクセシビリティ機器を作っていますよ。この4企業については指針ができたことによっていろいろ動きがあったように思います。4社が多いか少ないかは解釈によると思いますが、指針の効果はあったと思っています。

竹 指針を尊重する立場で、4社はアクセシビリティ機器の開発に取り組んでいるわけですね。この4社の開発の方向性などは、先生もご存じなのでしょうが。

太 指針の性格上、視覚障害者と上肢障害者に

重点が置かれています。この2分野については、各社ともかなり努力しておられると思います。

竹 4年前にできた指針の見直しの予定などはありますか？

太 昨年度、既に見直し作業を行いました。改定版の案を公表して意見を聞きたいと思っていますので、改善してほしいと思っている人は、改定版を見て意見を出してください。改定版は通産省に連絡すれば見せてもらえると思います。（連絡先：通商産業省機械情報産業局電子機器課 TEL.03-3501-1511（内線3341） FAX.03-3580-6073）

竹 こういった所に提案するにしろ、これからコンピュータを使う障害者が増えていかなければいけない。消費者としての前向きな姿勢が大切じゃないかと思います。買う前から文句だけ言うのではなく、買って使ってみて、それから具体的な意見が出るのではないかと思うんですが、この点はどのように思われますか？

太 メーカーを敵と思わず、味方として巻き込んでいくような活動をして欲しいですね。開発を担当する技術屋さんとも意見交換できるような障害者ユーザーを育てるプロップであって欲しいと思います。

竹 私自身、メーカーの開発をしている人とお話する機会が多いのですが、この分野を担当している人達は皆さん非常に熱心なんです。でもサポート機器を一つ開発するのに何百万、時には何千万円もかかる。ユーザー個人に負担できる金額ではないので、モニターとして使ってもらおうと、返ってくる答は悪口ばかりで非常にむなしい、という話を聞いた事があります。

太 1つのものを作るというのは非常にお金がかかるのです。日本では開発費に見合った需要が見込めない現状なので、開発も遅れているのではないかと思います。バブルのはじけた現状で、企業の社会貢献活動としてサポート機器開発を望むのは難しい。行政的バックアップが必要ですが、これも障害を持つエンドユーザーの声や、世論の高まりがないと実現は難しいでしょう。

竹 パソコンが欲しい、欲しいと言っているだけではダメ。実際に買って使って、そしてユーザーとしての声を機器に反映させることが必要！ということで第1部は終了したいと思います。太田先生、ありがとうございました。

第二部：公開質問会

パネラー 太田 茂 先生（川崎医療福祉大学教授）

繁 周作 氏（富士通BSC：CPIによる上肢言語障害）

坂上 正司（プロップ・ステーション役員：頸髄損傷による上下肢障害）

桜井 龍一郎（FLANKER編集長：頸髄損傷による上下肢障害）

亀山 英昭（プロップ視覚障害部バンガード代表：視覚障害）

司会 竹中 ナミ（プロップ・ステーション代表）

介護福祉士としてのコンピュータ支援とは？

竹 それでは、これから第2部の公開質問会に移ります。最初に岡山からお越しの岡山総合福祉専門学校の職員の方からの質問です。この学校では介護福祉の専門コースで、これからコンピュータを導入していかれるそうですが、介護福祉士としてのコンピュータ支援を、どのように考えたら良いのでしょうか？

太 ちょっと極端な言い方ですが「コンピュータでできる事とコンピュータすべき事は違う」というのが私の持論なんです。言葉が書けない、しゃべれない人の場合、コンピュータでコミュニケーションするのも重要だと思うんですが、コンピュータ教育の手順から言うと、事務処理のように、まず、コンピュータでなければならない事を先に覚えてほしいと思います。ただ、学校に教える人がいるかどうかという問題がありますが。

坂上（以下坂） 質問の主旨に合うかどうか分からないですが、障害を持つ人がコンピュータを選ぶ時にアドバイスできるような立場の人があまりいません。そういう事を教えられるような人が、介護福祉士に限りませんが、福祉分野から出てきてもらえたら良いな、と思います。

竹 障害者と接する人の中から、コンピュータの指導やアドバイスのできる人が育ってほしい、という事です。

開発されている方へのメッセージ

竹 次の質問は、企業のSE（システム・エンジニア）で開発を担当している方からです。開発する側とユーザとのニーズのすり合わせが重要だと思いますが、自分達が開発者としてどんな事をやっていけばいいのでしょうか？

亀山（以下亀） 開発段階で、ということでしたら、ぜひユーザの意見を取り入れて頂きたいですね。僕自身（ちなみに僕は全盲です）がフリーでプログラマーをしていて、毎日コンピュータを触っています。で、システムの専門家とのお付き合いも多いのですが、開発する側の人間同士として「こんなものも作れるのじゃないか」「こんなものがあったら良いのにね」なんていう会話をしょっちゅう交わします。技術的なことというのは、資金的なことがどうにかなればクリアできますが、むしろソフトを作る側と使う側のコミュニケーションがあれば、もっと開発が進むのに……と思います。開発者の皆さんに、こういう会合にいらして頂くのも重要ですし、ニーズを受け止められる窓口を開発企業に置いてもらえると思います。行政には、サポート機器を開発する企業と、サポート機器の必要なユーザに対しても、もっと補助を考えて頂けたらなあ、と思っています。

繁氏（以下繁） 開発者が、どうやって障害者とコミュニケーションをとればいいのかということなんですが、今言われたように、こういう会に参加するのも一つの方法ですが、最近はパソコン通信という便利なものがあります。このプロップ・ステーションにもネットワークがありますし、PC-VANやNifty-Serveなどの大きいネットの中にも障害者のグループがあるので、そういうところへアクセスして頂いたら、生の声を聞くことができると思います。